

Keiba Global Front Line



競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します

合田 直弘

今月の会報が皆様のお手元に届くのは、パリロンシャンを舞台としたG1凱旋門賞(芝2400m)が目前に迫った頃かと思う。

「旬な話題」が売りのこのコラムも、凱旋門賞にちなんだネタをお届けしたい。ただし、予想を含めた展望は既に様々なメディアに溢れているはずで、ここでは少し切り口を変えてみたいと思う。9月に入って、お膝元の仏国のみならず、欧州全域で盛り上がりを見せているのが、「凱旋門賞は現状の競走条件のままでのよいのか？」という議論だ。

競馬フアンの皆様には、今さらご説明するまでもないことだろうが、凱旋門賞に出走する資格があるのは、3歳以上の牡馬と牝馬だ。すなわち、騊馬には出走資格がない。

近年では、20年に条件の見直しが行われ、G1ムーランドロンシャン賞(芝1600m)、凱旋門賞へ向けた古馬の前哨戦G2フオワ賞(芝2400m)、3歳の前哨戦G2ニエル賞(芝2400m)などが、この年から騊馬に開放された。その一方で、G1ジャンルクラガルデル賞(芝1400m)など4つの2歳G1、3歳G1のパリ大賞(芝2400m)やジャンプラ賞(芝1400m)、真夏のマイル王決定戦として日本でも知名度が高いG1ジャックルマロワ賞(芝1600m)などは、この時も条件は変わらず、

騊馬はオミットする形で今年も行われている。

さらに、競馬発祥の地・英国や、日本と同様に、仏国でも騊馬は3歳クラシックに出走できない。3歳クラシックには、未来に残す血を選別するという使命があるからだ。

仏国における競馬統括団体フランスギャロは、昨年12月に会長がエデュアルド・ド・ロスチャイルド氏からギョーム・ド・サンセーヌ氏に交代。組織改革が行われ、首脳陣の顔触れも変わって、大きな転換期を迎えている。仏国における競馬を今後どのように発展させていくか、新たな戦略の構築に着手している中で、凱旋門賞とジャックルマロワ賞の出走条件を見直す可能性が浮上したのである。

その背景にあるのが、今年の凱旋門賞を目指す顔触れだ。仏国における2400m路線のトップグループにいる2頭が騊馬で、凱旋門賞の出走資格がないのである。

1頭は、フランソワ・アンリ・グラファール厩舎のゴリアート(騊4、父アドラーフルーク)。今年5月にパリロンシャンのG3エドヴィル賞(芝2400m)を制し重賞初制覇を果たした同馬。その後、G2ジャンティー大賞(芝2400m)4着、ロイヤルアスコットのG2ハードウィックS(芝11F211y)2着を経て、7月27日にアスコ

ットで行われたG1キングジョージ6世&クイーンエリザベスS(芝11F211y)を快勝。8月8日に発表された世界ランキングでは、レイティング125を獲得した同馬が距離コラム「L」で首位に立っている。

もう1頭は、これもフランソワ・アンリ・グラファールが管理するカラダガン(騊3、父グレンイーグルス)。今季2戦目となったG3ノアイユ賞(芝2100m)を制し重賞初制覇を飾ると、続くG3オカール賞(芝2200m)も連勝。さらに、ロイヤルアスコットのG2キングエドワード7世S(芝11F211y)を6馬身差で制し、重賞3連勝を達成した。同馬の能力がさらに高く評価されたのが、8月21日にヨークで行われたG1インターナショナルS(芝10F56y)で、トラックレコードで制したシティオウトロイ(牡3、父ジャスティファイ)の1馬身差の2着に健闘。9月12日に発表される世界ランキングでは、上位進出が確実視されている。

ゴリアート、カラダガンの2頭が不在で、最強馬決定戦と言えるのか、という声や、メディアやファンの間から聞こえてきた中、仏国の競馬日刊紙ジュールドギャロが催したファン投票では、騊馬出走容認派が58.5%、反対派が41.5%という結果が出ている。今後、議論がどう深まっていくかに注目したい。